



ナイショの生徒会長  
放課後はキミの下着モデル♥

わかつきひかる

illustration ◎あきら

美少女文庫  
FRANCE  SHOIN

最初のヒミツ

●●マジメな生徒会長が赤のスキャンティ？

よくあることのはずだった。

教室を出ようとした男子生徒と、廊下を歩いてた女子生徒がぶつかった。きゅんと悲鳴をあげて、女子高生が尻もちをついた。今、この瞬間も全国の高校や中学で、ざらに起こっているだろう平凡な出来事。

だが、菅野優一すがの ゆういちは、彼女を助け起こすことも忘れて固まってしまっていた。

——いやまさか、これはありえねえ。そんなはずはない。僕の勘違いだ。生徒会長がそんな……そんなバカな……。

信じられなかった。

目から入る情報信号に、誤りがあるとしたか思えない。尻もちをついた彼女は、膝がゆるんでしまっている。

丈の短いヒダスカートがめくれあがり、ぷるぷるの白い太腿の奥で、ショーツの奥底がのぞいていた。

ショーツに包まれた秘唇がはつきり見える。白いはずのそこは、真つ赤だった。これがパンティの色だと理解するまでしばらくかかった。太腿のヌメツとした白さが下着のローズレッドを強調し、目が覚めるほどあざやかだ。

スカートの隙間から、お尻の脇が少し見える。スキヤンティというのだろうか。ロライズタイプのショーツだった。二重布に包まれた大陰唇の中央に通る切れこみも、太腿の付け根に食いこむゴムの様子まではつきり見える。

永遠なのか、一瞬なのかわからない時間が経過した。

「気をつけてよねッ!」

彼女は手でスカートを直すと、ぱっと立ちあがった。ほんのり赤くなった顔が、怒りのあまり硬化している。

ストレートロングの黒髪が頬にまとわりつき、整いすぎて冷たい印象を与える顔立ちに、なまな色気を加えている。

柳眉<sup>りゅうめい</sup>を逆立てて優一をにらむ表情は、どきんとするほど美しい。生徒総会のととき、壇上に立つ会長を見あげながら綺麗な人だと思ったものだが、怒った顔は、よりいっそう美しく見えた。

廊下を歩く生徒のひとりから声がかかった。

「生徒会長、だいじょうぶですか？」

「だいじょうぶよ」

その瞬間、生徒会長の、こわばっていた表情が、一瞬のうちにやわらかくなった。生徒総会で議事進行をしているときと同じ笑顔が浮かんでいる。

「でも座りこんでたし、気分が悪いのかなと思って……」

「心配しないで。一年生とぶつかっただけよ。なんでもないわ」

悪魔から天使へと仮面をつけ替えたような見事な変貌に、優一はたじたじと後ずさる。

——怖え……っ。

生徒会長は声を出すこともできずすくんでいる後輩に目もくれず、肩の上で髪を払うと、スツと背中を伸ばして歩き去っていった。



「生徒総会をはじめます」

美貌の生徒会長が壇上に立つと、ざわざわとしていた体育館が、水を打ったように

静まりかえる。

つやつやの黒髪、澄んだ瞳、形のいい鼻梁びりょう、スツと伸びた背中、長い手脚。なにをとつても完璧だ。

胸から下は、舞台上に隠れてしまつて見えないが、セーラー服の胸もとは形よく盛りあがり、プロポーションのよさを伝えてくる。

「まず生徒会予算の報告ですが……」

書類に目を落とし、数字を読みあげていく。マイクを通してるとはいえ、声ははっきりして聞き取りやすい。頭のよさを感じさせるてきぱきした議事進行は、生徒会長を絵に描いて額に入れたようだった。

——志帆しほちゃん。今日も綺麗だな。あのおっぱい、でっかいねえ。

——うん。片倉かたくら会長つて、ほんと綺麗ね。成績もよくて、スポーツもできるもんね。完璧な人つているのねえ。

——そうかなあ。なんかこう、優等生つぽいつてか、お堅い雰囲気があるけどね。

——そりゃまあ、片倉悠帆ゆうほの娘だし、品行方正で当然でしょ。

優一はにこやかに予算額を読みあげる生徒会長を眺めながら、生徒たちのウワサ話を聞くともなしに聞いていた。

片倉志帆。

我が校が誇る才媛だ。

スポーツ万能成績優秀、品行方正才色兼備の優等生。

プロポーシヨンも顔立ちもタレント並みの美しさだ。

真面目でかたくなな雰囲気があるものの、生徒会長なのだから当然ともいえるだろう。

かてて加えて、テレビや雑誌で活躍中の、美貌の教育評論家・片倉悠帆のひとり娘だ。

優一の憧れの先輩だったその志帆が、制服の下に、セクシーレッドのスキヤンティをつけていた。

——あのセーラー服の下は、ローズレッドのスキヤンティなんだ……。

なのに、その想像は、エッチな気分をもたらさなかった。志帆は、すごい顔で優一をにらんでいた。

幸運どころか、とんでもないことに巻きこまれてしまったのではないかという予感がふくらんで、冷や汗がたらりと背中を伝う。

——ほ、僕の勘違いだよな、うん。

——僕はなにも見なかった！ なにも見なかったんだっ!!

そういうことにしておこう。問題に向き合うよりも、うやむやにってしまうほうが

いい。生来の逃避癖が頭をもたげた。

壇上の志帆は、あくまでもにこやかに、生徒総会の議事進行をつづけている。

☆

優一は、水道の蛇口を逆向きにして、水を飲んでいた。体育の授業で渴いた喉に、冷たい水が染み渡る。

「きや」

水道の向こうで、女の子の小さな悲鳴が聞こえた。

書類がひらひらと空を舞う。プリントを持って廊下を歩いていた女子生徒が、紙の束を落としたらしい。

「や、やだ……っ」

焦った気配が伝わってきて、白い手がプリントを集めている様子が水道の壁の向こうに見えた。

「手伝おうか？」

ひよいと顔を出した優一は息を呑んだ。

しゃがみこみ、紙を拾い集めていたのは、生徒会長の志帆だった。コピーの束は生

徒会の書類らしい。

今日二度目の接近遭遇に後ずさりしてしまったところ、志帆がキツと優一をにらんだ。そして、上履きのままで優一の近くにやってきた。

笑顔の形に口角があがっているが、目が笑っておらず、なんとなく恐ろしい。

「う……」

逃げようかどうしようかと迷いながら体をすくめていたところ、志帆の上履きを履いた小さな足が、優一の足の甲の上にドカッと乗った。

「わーっ、わわわーっ」

ローファーではなく上履きなので、それほど痛くなかったとはいえ、いきなり足を踏まれた驚きにわあわあ悲鳴をあげてしまう。

「忘れなさい！」

志帆はすごんだ。

甘い匂いのする小柄な身体から、怒りの波動がブワツとばかりに立ちのぼり、生徒会長の周囲を取り巻いた。黒い煙のような激怒のオーラがどよんどよんとたゆたっている。

その様子には、お堅い印象はあるものの、生徒たちの人望を一身に集めるやさしく頼り甲斐のある生徒会長の姿はカケラもない。

「誰かに言ったら殺すからね……っ!!」

静かな、だが、それだけに迫力のある口調だった。

たっぷりと呪詛しゅそを乗せた脅迫の言葉は、大人でもビビるであろう迫力に満ちている。子供なら泣きだすに違いない。

優一はもはや逃げ腰だ。

——ほ、ほんとうだったんだ。僕の勘違いじゃなくて、片倉会長のパンツ、マジで赤だったんだ……。

——ど、どうして？　なんで赤？　あんなもん、どこで買うんだ？　フツー赤なんか穿かないだろ？

——だ、だめだ。忘れるんだ。考えるな。殺されるぞ……。

殺されないまでも、生徒会長のあの迫力だと、なにかされるのは確実だ。

「うう……っ」

「なにをうなっているのよっ。誰にも言わないと約束なさいっ!!」

優一は、言葉もなく、コクコクとうなずいた。